

人間としての患者さんを見ること

「関係ないでしょう。もう帰ってください。」精神看護実習で受け持ったAさんが私に言った。愕然とすると同時に、何とかしてAさんにとって「関係ある人」になりたいと思った。

どうすれば関係が築けるのかと考え、自分の関わりを振り返ることから始めた。事前情報として得た、妄想による他者への暴力や破壊行為といったAさんの行動の一場面だけに囚われていなかったか。一人の人間としてのAさんを見ることができていたか…。反省する中で、一対一の人間関係をやり直そう、疾患ではなくAさんその人を見なければと気づいた。

昼時、Aさんは仲間を集め麻雀を始めようとしていた。Aさんは麻雀が大好きだ。麻雀の準備となると足取りも軽く、重いテーブルも一人で引っ張り出す。私はオンラインゲームでしかやったことがないけれど、入れてもらっちゃおう。Aさんは連勝した。カルテを通してみるAさんと麻雀牌ごしにみるAさんは全く違って見えた。その時からAさんを見る私の視点が変わったように思う。介入する問題を探すのはやめ、大事な趣味を持って楽しみのある生活を送るAさんを少しでもお手伝いさせてもらえたら、という気持ちで病棟へ行くようになると、Aさんとの距離は自然と近づいて行った。

折しも二週間の実習の真ん中の土曜日、病院で秋祭りがあり、Aさんがそこでカラオケを歌うと耳にはさんだ。休日にまで行ってもいいものだろうか、私服だしいつもと様子が違うからAさんどう思うかな、と少し不安を抱えながら病院に行った。「あっ、看護婦さん！」Aさんは私を見つけると笑顔で近づいてきてくれた。手をつないで出店を回り、お好み焼きやコーヒーを勧めてくれた。カラオケが始まり、Aさんは『学生時代』を熱唱。その姿がとても輝いていて、胸が熱くなった。最後はマイクを片手にガッツポーズで会場は拍手喝采だった。

実習最終日の挨拶に行くとAさんは師長さんと売店へ行くところだった。それまでのお礼を伝えるとAさんは、乾杯しましょう、とドリンクをおごってくれると言った。「学生なので、お気持ちだけ…」と言いかけた私を師長さんが笑顔で制した。「Aさんの気持ちだから」。「グイッといって」Aさんがピンを高く上げ、合わせたピンがカチャンと鳴った。その瞬間、紛れもなくAさんと私は一人の人と人同士だった。

先入観なく、というのは思っているより難しい。知らず知らずのうちに病名の陰に隠れた患者さん自身が見えなくなってしまうが、そこにいる一つ一つの人生の主人公こそが看護師が向き合うべき対象なのだとAさんに気づかせてもらったことを私はずっと忘れない。